

文芸批評はどうなっていくのか

勝又浩

特集 文芸評論の危機

君逝きて電子文字降る枯野かな

この頃はすっかり俳人になった趣の批評家井口時男の句。と言っても、批評家を全く廃業したわけでもなく、「春風馬堤曲」ふうに俳句を折り込み連ねた散文で新様式の作家論などを試みている。これは、私には真似のできない批評スタイルで、なるほどと思いがらいつも読んでいる。

この句もそうした作の一つで、正しくは「室井光広のモチーフによる変奏十八句」(『その前夜』所収)のうちの掉尾の一句である。従ってこの「君」は直接的には室井光広のことであるが、俳句だから一つに限定する必要はないであろう。「君」にはいろいろな人、さまざまなコトが連想されるが、今この原稿のことと考えている私には、真っ先に批評のことが来たのだ。まさに、

批評消えて電子文字降る枯野かな

が、最近の私の感慨だ。以下に、そう感ずるに至った経緯を述べてみたい。

している、それが、つまり短歌ブームといわれるものの実質なのだ。ネット短歌——そんなのは、一面では素人大衆のお遊びに過ぎないが、もう一面ではその数が、修行を重ねて成る歌人たちを圧倒し、覆い隠し、最終的には短歌というものを壊してしまうかもしれない勢いなのだ。前記瀬戸夏子は、短歌の「私性」を言った岡井隆の古典的なことを引いて、勢いを増したネット短歌がその真反対の方向にあることを指摘している。その昔、万葉、古今、新古今ではそれぞれ歌の質が変わってきたが、同じように、ネット短歌集が編まれば従来の短歌との質の変容を明らかにすることだろう。

さらに、ネット短歌の出現にはこんな側面もある。

戦争を始めた人が飼っているおれの故郷のうつくしい犬

と、この一首が二月二四日のツイッターに現われた。言うまでもなくプーチンのウクライナ侵攻の始まったその日である。プーチンが日本から贈られた秋田犬を「夢」と名付けて可愛がっていることは、最近も報じられていた。この一首にはたちまち反響があり、その翌日には英訳を載せた人もあった。そして三月の半ばだろうか、瀬戸夏子の文章が書かれた時点で既に一万一千件のリツイート、四万五千件の「いいね」が返されているのだと言う。その波及の速さ、そして決定的にはその反響の数、これらは従

いま短歌がブームなのだそうで、その実態実情が「文學界」(五月号)の短歌特集によく集約されている。なかでは瀬戸夏子「人がたくさんいるということ」が「ネット短歌」の現状を紹介していて面白かった。「二次創作短歌」推し短歌「アイドル短歌」「BL短歌」等々、初めて聞く「短歌」群の名がいろいろあげられていてびっくりする。昭和五〇年代だったと思うが、「昭和万葉集」というものが編まれた。そのときはまだ、基本的に伝統的な分類、部立てできていたが、もし「平成万葉集」を作るとなれば、もうそうはいかないだろう。何しろマンガやその人物たちの名前を織り込んだり、人物たちになり代わって詠まれた歌が何種も競い合っているのだ。

ところで、こういうことを可能にしているのが、言わずと知れたツイッターだSNSだといった、一口にネットと言われる強力な通信媒体なのだ。今そのネット上に、これまでに考えられなかった膨大な数の短歌(俳句)が出現

来のどんなメディアにもなかった、インターネットゆえの性格であり、また力である。こうした発表の場があれば、従来の日刊新聞その他、各種の短歌投稿欄、仲間をつくる結社、歌会、そんなものは必要ない、ということになるだろう。不安定なものだとはいえ、新しい形の短歌共同体ができていくわけだ。

ネット時代短歌の現象、あるいは問題は他にも種々あるが、今はこれまでとしよう。ここにあげた例は要するに、短歌(俳句)が、世界遺産に登録しようというほど短い詩であるというところから生まれた新しい展開、あり方だと言つてよいであろう。短詩であることによつて、今の時代にフィットし、蘇生しているわけだ。言い換えれば、文化全般の地盤であるメディア構造そのものの変化によつて文学全体の構造、比重関係が変容しつつある、そんな時代なのだ。

*

こんなふうには今は短歌の隆盛時代なのだから、必然的に批評は衰退の時代なのだ、とは断言できないだろうが、歴史的にはこの逆、批評の盛んだった時代、短歌(俳句)が受難時代だったことは事実である。

われわれの育った戦後(派)の文学は、敗戦による廃墟からの出発、新しい文化の建設を理念としたが、その建設のために必要なものが、測量図、設計図としての思想・批

文芸批評はどうなっていくのか

評であった。そうした時代のなかで、短歌（俳句）、合わせて日本固有の私小説が、思想性のない文学として批判され忌避されたのである。だが、それから半世紀余、二度目のオリンピックまでやって建設の時代は終わり、もはやいかなる意味でも設計図など不要、人々は出来上がった社会のなかでひたすらインスタ映えのする光景情景話題を探し、三十一文字に切り取っては伝え合っていて楽しんで、というわけである。

そしてその裏側が、たとえば「群像」新人文芸賞評論部門の経緯であるだろう。平成二六年、五七年間続いた文芸評論部門を、文芸の枠を外して独立させたが、それも一〇年とは続かなかつた。一昨年、とうとう廃止になった。今、単行本以前、単独の評論一つで批評家として登録する入口はなくなってしまった。

振り返ってみれば、文学の歴史のなかで最も古い様式が詩、日本では短歌であり、最も新しいジャンルが批評であった。そして、それに重なる次の要素が、もつとも感覚性の強いのが短歌であり、最も思想性の強い領域が批評だという事実がある。この一点から見れば、インターネット時代の今は感覚性先行、思想性後退の時代なのだ。それが報道過多時代のなかの文学、建設のない、享受の時代のなかの文学なのだ。

そういう次第で、我々には、結局のところは井口時男の

言う「電子文字降る枯野かな」の時代なのだ。それゆえに今、批評は冷や飯時代なのだと思うが、しかし、だからと言って批評が無意味だとも絶滅するとも、私は考えていない。それは文学全体のバブル時代が終わって秋風が吹いているのと一体の現象なのだ。もつと言ってしまえば、今バブル現象らしいネット短歌もいざれ飽きられる、変質を迫られる時がくるだろうが、そのとき、ネット社会には乗れなかつた批評が改めて見直されることもあるだろうと、私は老人らしく考えている。



勝又 浩
かつまた ひろし
1938 横浜市生まれ
文芸評論家
法政大学名誉教授
1972 第17回「群像」
新人賞評論部門受賞
2016 第28回和辻哲郎
文化賞受賞
「季刊文科」編集員

